

## アナゴの生態を知りたい！

アナゴはどこで産卵し、どこからやって来るのか？ここでは、多くの謎に包まれたアナゴ(マアナゴ)の生態について紹介します。

### マアナゴ

Conger myriaster  
ウナギ目アナゴ科

アナゴ類は、ウナギやハモ、ウツボなどと同じウナギ目という大きなグループに属し、その中でさらにアナゴ科というグループにまとめられています。アナゴ科にはマアナゴ、クロアナゴ、ハナアナゴなど15属27種(世界に32属、約150種)が含まれています。

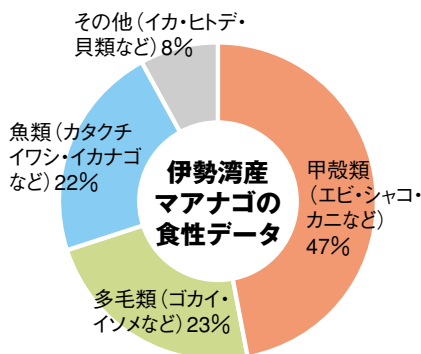


### ■どこに住んでいるの？

アナゴは、日本沿岸のほぼ全域、朝鮮半島沿岸、東シナ海などに広く分布する内湾性の魚で、穏やかな砂・ドロ地に生息しています。まれに300m以上の深海で漁獲されることもあるので、日本沿岸から近海の深海まで広く生息していると考えられています。

日本沿岸では、伊勢湾をはじめ、仙台湾、東京湾、大阪湾、瀬戸内海、日本海沿岸などで漁獲量が多く、主な生息地になっています。

### ■何を食べているの？



アナゴは、イワシやイカナゴなどの魚類、エビなどの甲殻類、イカなどの軟体動物のほか、ゴカイや貝類など、湾内に生息する生物を何でも食べるワイルドな魚です。成長は早く、冬から春にかけて来遊した当歳魚が、秋には25cm前後になり、越冬後には30cm程度まで成長します。

### ■養殖はされているの？

ウナギの養殖技術は確立されていますが、アナゴの養殖技術の確立は困難を極めています。

アナゴの生態については、多くのことが謎に包まれています。現状では、アナゴの試験的な養殖や、短期的な小型魚の蓄養は行われていますが、養殖技術の確立までには至っていません。

## ■<sup>しぎよ</sup>仔魚「レプトケパルス」

アナゴの仔魚（生まれて間もない幼魚）は、透明で柳の葉のような形をしていることから、「レプトケパルス」と呼ばれています。

伊勢湾では早春に、潮流に乗ってやって来た生後60日～150日のレプトケパルスが、コウナゴ漁の網に大量にかかることがあり、漁師の間では「ノレソレ」などと呼ばれています。

湾内に入ってきたレプトケパルスは、生後約100日～200日で成魚の形へ変化し始め、海底に定着して生活

を始めると考えられています。

しかし、湾内に入ってくる以前の生態は、いまだ解明されていません。それは、沿岸海域で70mm以下のレプトケパルスが漁獲されることはごく稀で、なおかつ成熟した卵をもったアナゴを見た人もいないからです。成長過程や産卵地、どのようにして日本沿岸にやって来るのかなど、謎は深まるばかりです。



レプトケパルス

## ■子どものころは漂流者、大人になったら放浪者？

これまで、アナゴ同様に謎に包まれていたウナギの生態が、少しずつ明らかになってきています。調査によると、ウナギの産卵地はフィリピンの東方約1,000kmの太平洋沖合で、そこで生まれたものが、黒潮に乗って日本近海に流れ着くことが判明しています。

アナゴも、ウナギ同様、東シナ海やフィリピン近海に産卵地があり、そこで生まれたレプトケパルスが、黒潮に乗って日本近海に流れ着き、伊勢湾などに来るのではないかと考えられています。

また、アナゴは成長に伴い、湾外へ移動するとも考えられています。成熟した卵を持ったアナゴを見た人がいないのは、アナゴが産卵のために沿岸を離れるからなのかもしれません。

子どものころは潮流に身を任せる漂流者、大人になると産卵地を求めて旅に出る放浪者——アナゴは、そんな雄大なロマンを秘めた魚なのかもしれません。

